

絵画はどのような時代であっても絶えることのないかにも人間的な営みであり、時空を見える形として明快に示す記録であると共に、これまでの内省を促しこれからを示唆する予兆ともなり、言葉を紡ぎだすエポックとなり詩でもあり、固有名と同様画家その人そのものである。

画家が絵を描くことで生を全うできる時代は健全であると思わせる川合朋郎は、いわゆる絵画の原理的な力である「人間が描くこと」を坦懐に「絵画というシステム」にて率直に展開する。異種文化交配のせわしい時代が終焉し、想像力と動機、あるいは描く意味を限定し趣味的な傾向を強調反復する絵描きではないのは、彼の世代がニュートラルな状況を欲望していることに理由があるかもしれないが、それ以上に敢えて画家の鍛錬が唯物的に抑制され検証的に行われるからだろう。

彼の画面が表象する出来事は時に奥行きのある寓話となり、時に描く行為、痕跡がアイコンを切断する。つまり画家はイメージ（想起）と描く行為との境界をすたすたと歩くのであってそのどちらに転がり落ちてでも彼はやりと立ち上がり再び足元の危うい境界へ向かう。だから私たちは彼の絵画を観ると、物語の断章を捉えながら画家の吐息を受け取り描くことの愉悦を得ることができる。

川合朋郎の絵画は静岡県三島の彼のアトリエで静謐に淡々と制作されている。

トボスとは

作品が実現される場所そのものを制作者の「動機」とし、その場所への固有な「アプローチ」を考えられないか。場所を訪れ出会う人々の、その「アプローチ」への検証・参加が加わることで、「考えられている場所」「考え続ける場所」という社会的場所性（時空環境）が生まれ、つくられたもの自体（作品化＝アプローチ）の行方も、これまでと違った変異、位相が起こるのではないか。こうした問いによってトボスは発想され、トボステラソノは作家の希望もあり場所の特性を考慮し三ヶ月に渡る展示期間とした。

コーディネーター / 町田哲也

虹を描く人 2012 年 キャンバスに油彩 610 x305 mm



川合朋郎

2001 東京藝術大学 美術学部絵画科油画専攻 卒業

2003 東京藝術大学大学院 美術研究科 修士課程 修了

主な個展

2012 ギャラリーくさ笛 / 名古屋

ニッチギャラリー / 銀座

2010 ニッチギャラリー / 銀座

2008 新潟絵屋 / 新潟

ウィリアムモリス 珈琲 & ギャラリー / 渋谷

ニッチギャラリー / 銀座

2006 ニッチギャラリー / 銀座

2005 ギャラリー GAN / 青山

2003 ギャラリー GAN / 青山

2002 ギャラリー北村 / 南青山

主なグループ展

2012 アート京都 2012(エクリュの森ギャラリー) / 京都

2011 「YOKOHAMA みなとみらい展」 横浜市民ギャラリー / 神奈川

AAF アートフェア / ニューヨーク

2010 アートアワードネクスト 東京美術倶楽部

「遠くに投げられた種子 II」 日本トルコ交流展 ニッチギャラリー / 銀座

Art Shanghai 出品 (ニッチ ギャラリー)

2009 「Distance Not Applicable」 Pg Art Gallery / イスタンブール

「U-Planning 第 1 回展 / U ボートが会った 4 人の作家たち」 CORSO / 東京, 神保町

「YOKOHAMA みなとみらい展」 横浜市民ギャラリー / 神奈川

2008 TAMA VIVANT 2008 / 多摩美術大学、横浜、みなとみらい駅

Art OSAKA 出品 (工房 親)

2007 Art Shanghai 出品 (ニッチギャラリー)

「YOKOHAMA みなとみらい展」 横浜市民ギャラリー / 神奈川

2006 「TAMA VIVANT 2006」 (多摩美術大学、横浜みなとみらい)

Art Shanghai 出品 (ニッチギャラリー)

2005 二人展 ニッチギャラリー / 銀座

2003 「New Wave」 ギャラリーくさ笛 / 愛知

「熊谷守一大賞展」 アートピア付知交芸プラザ / 岐阜

2002 「関口芸術基金賞入選作家展」 柏市民ギャラリー / 千葉

2001 「三浦美術館大賞展」 三浦美術館 / 愛媛

「第 15 回 ホルベインスカラシップ」

「フィレンツェ大賞展」 雪梁舎美術館 / 新潟

パブリックコレクション

東京藝術大学大学美術館

http://tomorokawai.com



人々は議論に夢中で 誰も山の実しさに気づかないという夢 2012 年 キャンバスに油彩 318x410 mm